

## 【カテゴリー I】

日本建築学会計画系論文集 第620号, 89-94, 2007年10月  
J. Archit. Plann. AIJ, No. 620, 89-94, Oct., 2007

## 原宿における建築集合体の形態・構成要素・心理評価の分析

ANALYSIS OF FORM, ELEMENTS AND EVALUATION OF COLLECTIVE  
FORM IN HARAJYUKU

太幡英亮\*, 西出和彦\*\*

*Eisuke TABATA and Kazuhiko NISHIDE*

Physical and psychological properties of collective form of architecture in Harajuku were analyzed on following 2 aspects.

- 1) Form and Elements.... Model of the collective form was classified into "street" type and "area" type. And distribution of physical elements in the collective form was classified into "scattering" type and "closeness" type.
- 2) Evaluation.... By using SD method with 24 couples of adjectives and correlation analysis, 3 evaluation axes are translated as meanings of "unity", "urbanity" and "amenity". And, identity of each collective form was analyzed by the evaluation of "similarity" in aggregation.

**Keywords :** Collective Form, Physical Elements, Identity, Similarity

集合体, 空間構成要素, 個性, らしさ

## 1. 研究の背景と目的

## 1-1. 研究背景

## 社会背景

2004年に景観法が施行され、全国的に景観ガイドラインの制定や景観評価の導入等が勧められている。電線類の地中化や屋外広告物の整理などが問題となる場合は比較的簡単にその改善方針を策定しやすいが、建築や通りを含めた街の空間の質が問題となると、改善の指針を得ることは簡単では無いだろう。例えば、安易に現在の生活と関係の薄い中世の歴史的デザインを再現したり、単に形態的な統一性をもたせるための堅苦しい規則ともなるだろうし、理想的な全体像が提示されることで持続的な変容が許されない場合も考えられる。そこで、既存の街空間の個性を掘り、現実的で持続的な変容・更新の判断基準となる指標が求められる。

## 歴史的街路の「まとまり」感

これまで、現代的な街の景観の問題は、一方で市街地景観の「乱雑性」と捉えられ、他方で地域ごともしくは建物ごとの個性が失われることによる「画一性」の問題として捉えられてきた。こうした「乱雑性」「画一性」という両極の問題を背景として、歴史的景観がもつ「統一性と多様性」が同時に存在する構造の価値が明らかにされてきた注1)。門内文2)は、歴史的街路景観の持つ類似と差異のネットワーク構造が、地域の文化・社会を背景とした豊かな意味を

内包したであろうことを指摘している。そもそも歴史的建築群が「統一性と多様性」の景観として認識され評価されるためには、その建築群にある共通性が認識され、それらがひとつの「まとまり」として認識されるという前提条件がある注2)。

## 都市のイメージと集合体

一方、都市のイメージ研究においては、志水ら(文4)が、わかりやすさを意味する「レジビリティ」と、多義性を意味する「アンビギュイティ」が相補的な概念であることを、「ビット(散在する情報単位)」と「チャンク(ビットの群化による新たな情報単位)」という情報理論の概念を用いて指摘している。そこでは、ビット(店舗)の多様性がアンビギュイティを高め、それらがチャンク(○○通りや複合ビル)としてまとまりを持つことで地区のレジビリティが高まるという段階的かつ発展的な構造が仮定された。そこから、店舗もしくは小建築が群化によって上位の集合を形成することによって、建築-集合体-地区(街)-都市という情報単位の階層化による都市のイメージ上の情報処理量を向上させ、イメージしやすさや意味の豊かさに繋がると考えることができる。K・リンチ文5)も都市のイメージの内容をバスやディストリクトといった5つのエレメントに分類しながらも、「たいていの観察者はイメージの組み立ての中間段階として各種のエレメントを複合体(complex)とでも呼ばれそうなものに分類している」と述べている。以上からも、エレメントと街・

本稿は、平成14年度日本建築学会大会学術講演梗概集で発表した「原宿における集合体の認識・要因・評価の分析」に、加筆、修正を加えたものである。

\* 東北文化学園大学科学技術学部  
住環境デザイン学科 助教・工博  
Assis. Prof., Dept. of Living-Environment Design, Faculty of Science and Technology,  
Tohoku Bunka Gakuen Univ., Dr. Eng.

\*\* 東京大学工学系研究科建築学専攻 准教授・工博  
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Graduate School of Eng., Univ. of Tokyo, Dr. Eng.

都市の中間段階としての複合体、即ちチャンクとしての集合体が、イメージ形成の助けとしてはもちろん、意味の器としての都市空間において重要な役割を果たす点については、都市空間研究においてより重視されるべきである。しかし、都市の階層性を意識しながら集合体を主題にした研究が積み重ねられたとは言えないようである。

そこで本研究では、「街の広がりの中で一つのまとまりとして認識された建築群」を「集合体」注3)として定義し、集合体を構成する個々の空間要素や建築物の持続的変容（部分の変化を含みながら全体としてある種の質は維持されること）を許容するこの概念をもとに、現代の都市空間を解析する。なおこの研究は、「集合体」の存在という仮定のもとに行われるものであり、イメージマップに代表される、都市がどのように認識されているかという意味での都市のイメージ研究を踏まえた上でのものである。

## 1-2. 目的

本研究は、分析・評価の対象となる集合体があらかじめ提示されるものではなく、まず、街の拡がりの中での集合体の発見・認識から開始される。次いで認識された集合体の形態と、その認識要因となつた空間構成要素を分析する。その後、各々の集合体の心理的空間特性を明らかにし、その集合体らしさ注4)を、「原宿らしさ」「東京らしさ」「日本らしさ」との関係から考察する。以上により、集合体の性質の分析モデルを提示し、各集合体の個性を捉えた上での持続的な環境変容の方針策定に資する基礎資料となることを目的とする。

## 2. 調査方法

本分析は集合体研究の基礎的段階であるため、まず多様な集合体が抽出されることが期待された。従って、調査対象としては、個々の建築・店舗の規模が小さく、かつ多様な建築が集積し、絶えず多くの人に利用されている魅力的な街として、原宿一帯（東京都渋谷区神宮前及び港区北青山三丁目付近）を選定した。調査は2002年3月、晴れた日の午後に行われた。

調査対象範囲が主として商業地域であり、居住者よりも来訪者の視点が重視されること、また、調査がやや専門的な知識を必要としたことから、調査員は複数大学の建築学専攻の学部4年生および大學生、計16人とした。

まず、各調査員に集合体の概念について教示し、次に、約3時間、調査対象として選定した範囲（手渡した地図の範囲）を、各々自由に歩いてもらい、手渡した調査シートをもとに歩行中に幾つかの質問項目に答えてもらうという現地調査を行った。

具体的な調査・記入は各々の調査員により以下の手順で行われた。

(手順1) 原宿の街全体を3時間程度自由に散策し、歩いたルートを地図上に記入する。

(手順2) 歩行中に、集合体を形成していると思った範囲を地図上に囲む。その際、その集合体に名前を付ける。

(手順3) 集合体の認識要因となつた空間構成要素を抽出する。調査シートには空間構成要素として、「建築について」4項目、「建築以外の構造物について」6項目、「建築を構成するエレメントについて」4項目、「その他の要素について」6項目、「特定のシンボルについて」1項目、また「その他」として自由記述してもらう項目を含め計21項目（表1）が用意されており、その中で集合体とし

ての認識要因にチェックマークをつけ（複数可）、その具体的な内容注5)として一言程度のコメントを記入する。またその要素が個性として好ましいかどうか7段階で評価する。

(手順4) 7段階の形容詞句対用いた22の評価軸を用いて、各集合体の印象評価を行う。

(手順5) 各集合体の「原宿らしさ」「東京らしさ」「日本らしさ」「好き嫌い」について7段階で評価する。

手順2~5については各自がグルーピングした各集合体において、その都度行ってもらった。

なお、本調査で用いた空間構成要素21項目には、予備調査注6)の過程で集合体を構成する可能性を持つと考えられた要素をあげ、不足分に対応するためその他の自由記入欄を設けることとした。本分析を通じてこれらの項目の妥当性を判断するものもある。また評価軸は、歴史的街路の心理評価に用いられてきた形容詞句から、主要なものを抽出し、現代の街空間評価において重要と思われる形容詞句を加えたものである注7)。

建築について	1 建築形態 2 建築の質感・色彩 3 建築の大きさ 4 その他	建築を構成するエレメントについて	11 屋根 12 開口 13 看板 14 その他
建築以外の構造物について	5 街路樹 6 ベーメント 7 街路灯 8 通り 9 広場 10 その他	それ以外の要素について	15 人 16 建築用途 17 店舗の種類 18 自動車 19 地形 20 その他 21 特定のシンボル

表1 集合体の構成要素21項目注8)

## 3. 分析

### 3-1. 集合体の形態に関する分析

手順2の調査から、16人の調査員によって計104の集合体が認識された。例として、調査員1、調査員8の範囲例を図1に示す。これをもとに、まず、集合体がどのような形態と大きさで認識されたのかを分析する。なお、本分析では、都市における集合体の抽出のために、地図上に「囲む」という方法をとった。これは、今回の調査があくまで「まとまり」をとらえる事を目的としたためであり、「ランドマーク」や「通り」や「曲がり角」といった、多くの都市のイメージに関する研究で用いられてきた要素よりも、むしろそれらの複合体としての集合体に注目したためである。

全調査員の認識した範囲を地図上に重ねて示したものが図2である。色が濃い所ほど多くの人に認識された範囲である。この図から、主に「通り」を中心として認識されている事が分かるが、複数の道を含んだ「一帯」として認識された集合体もあった。そこで、明治通りや表参道などの通りを中心として認識された集合体を「通り型」、平面的な広がりとして認識された集合体を「一帯型」と呼ぶこととする。なお「同潤会アパート」の様に、範囲内に通りを含まない場合も「一帯型」に分類した。結果として、集合体の認識形態は、街路景観を形成し、通りを中心とした「通り型」と、平面的な拡がりをもつ「一帯型」の2タイプに分類できた注9)（図5：横軸）。

また、例えば「Cat. St. (キャット・ストリート)」のように、その周辺を含め「裏原宿」として認識される場合など、認識された集合体の範囲の大小には幅があり、ズレもあるが、その範囲を重ねる

ことで集合体の中で多数に認識されたコアとも言える範囲が見えてくる（図2の濃い部分）。こうした範囲は竹下通り、明治通り、表参道、Cat. St. の4つの通り沿いに展開しており、例えばCat. St. の一部は裏原宿一帯のコアとして個性の際立った範囲だと考えられる。そこで、以降の定量的分析では、集合体の範囲のズレや大小よりも、こうしたコアの存在に注目し、同じコアを含む集合体どうしを同一の集合体に分類することで、定量的な比較分析を行う。具体的には図2より、過半数（8名以上）に認識されたコアを含む集合体（主要な集合体）として、「竹下通り（16）」「明治通り至代々木（10）」「明治通り至渋谷（8）」「Cat. St. 至外苑（9）」「Cat. St. 至渋谷（15）」「表参道至原宿（11）」「表参道至青山（9）」「同潤会アパート（6）」注10の8つを設定し、以降の認識要因や印象評価の比較分析に用いる事とする（カッコ内は抽出者数）。なお、明治通り、表参道については、交差点を境に集合体を分けた調査員も多いので、至渋谷、至外苑などと分けておく。こうした一体としても、あるいは別々のものとしても認識された集合体は類似の集合体と言えるだろう。

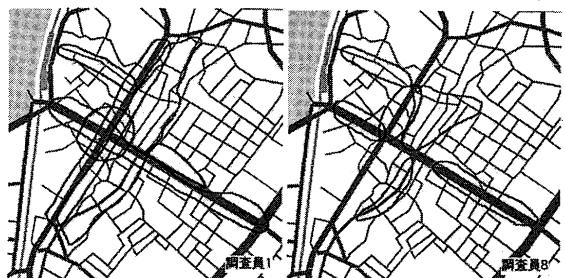


図1 集合体の認識範囲例

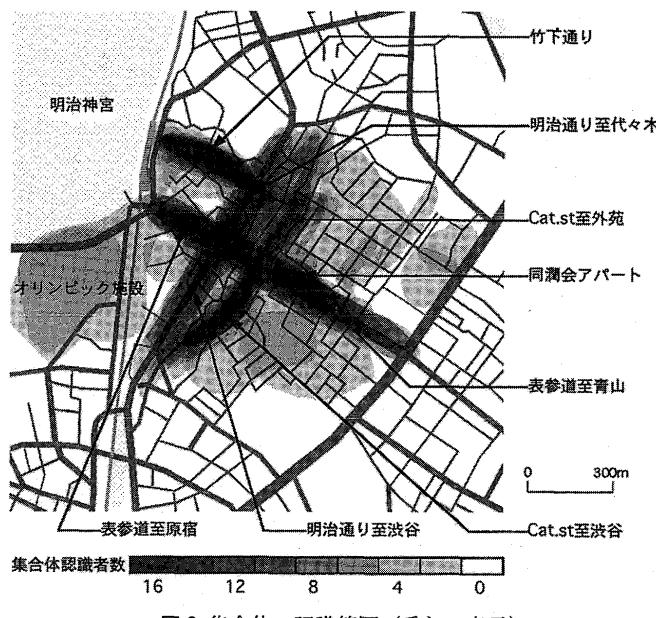


図2 集合体の認識範囲（重ねて表示）

なお、集合体の大きさについては、建築単体、街、それらの集積としての都市空間という、都市空間の階層の中では、建築単体と街の中間となる規模を持つものとして研究背景で仮定した通りであった。具体的には、街路景観として見渡せる程度の大きさ、歩行者にとって快適に利用できる程度の広さであると想定できるが、この点

については、調査員に提示した地図の大きさや、調査時間（約3時間）の長さ、「原宿」という街のイメージ上の大きさ等の影響を受けると考えられるため、また別の分析が必要であろう。

### 3-2. 集合体の構成要素に関する分析

手順3の調査から、個々の集合体の認識要因が抽出された。集合体としての認識を与える要因は、周辺から集合体を浮き立たせている要因であり、その要因となった空間構成要素が、集合体に個性を与えていていると考えることができる注11)。そこで、集合体の認識にどのような空間要素が影響したかについて分析するため、主要な集合体8つにおいて、認識要因として各要素を抽出した人数の集計結果を図3に示す。なお各集合体の認識者数（前述）が異なるため、その要因抽出者の母数は異なるが、ここでは純粋に各エレメントの抽出量で比較する。

集計結果から、各集合体で他と比べ多くの人に抽出された認識要因に注目すると、例えば表参道の「街路樹」や、Cat. St. 至渋谷の「開口・建築形態・街路灯」、竹下通りの「建築の大きさ・看板・店舗の種類」等が特徴的であり、これらの要素が各集合体を、それぞれ一つのまとまりとして認識させていると考えられる。

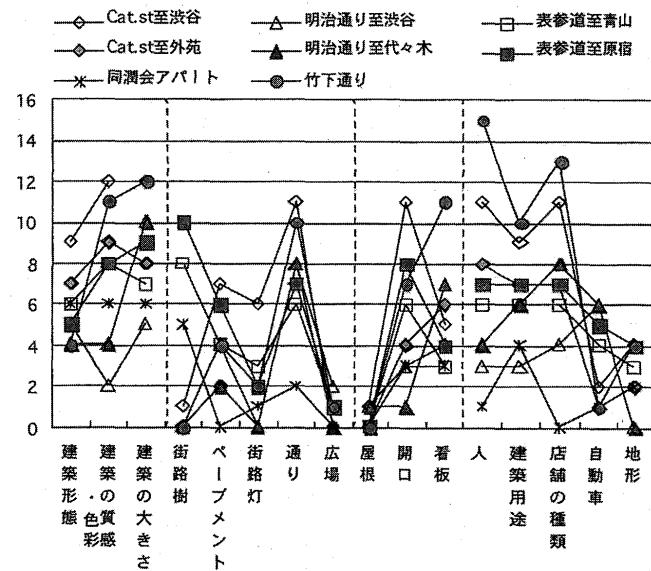


図3 認識要因抽出者数

次に、抽出された要素の具体的な内容の例をあげ、各要素を分布型式から分類する。手順3において具体的に記入された内容について「Cat. St. 至渋谷」を例にあげると、「開口」には「ガラスカーテンウォール」、「街路灯」には「街路沿いに連続」、「その他」には「路上販売」といった内容が記入された。これらの分布を示したもののが図4である。ガラスカーテンウォールは街路沿いに計8軒が存在し、街路灯は同一デザインのものが連続して配置され、路上販売は調査時において計4カ所で見られた。こうした各要素の分布について分析すると、保存された伝統的街路景観のように集合体のほぼ全ての建物が同じ質を含むような場合、即ち集合体の構成要素が「密集」している場合だけでなく、その一帯に同様の店が多いというような、集合体全体に共通した要素が「散在」するような場合もあり、原宿にもその様な例は多い。そこで、前者の、ある空間構成要素が

密集することにより認識される場合を「密集型」。後者の、散在することにより認識される場合を「散在型」と分類できる。前に分類した集合体の認識形態の2タイプ（通り型・一帯型）と、集合体の構成要素の2タイプ（密集型・散在型）の分類により、各々の組み合わせで「通り型・密集型」「通り型・散在型」「一帯型・密集型」「一帯型・散在型」の4分類をあげることができた（図5）。図中に、各分類に該当する集合体と構成要素およびその内容の例をあげている。主に、「一帯型」として認識された集合体においては「散在型」の要因分布が多く、例として「裏原宿」をあげることが出来る。「通り型」の集合体には「密集型」と「散在型」があり、前者に「竹下通り」後者に「Cat. St.」をあげることが出来る。なお、「一帯型」「密集型」の集合体では「交差点」が重要な認識要因となることが予想されたため、今後は、手順3で用いる構成要素の項目に加えるべきであると考察できる。

従来は、本分類における「通り型」「密集型」の街路空間が特に注目され、通り沿いに見渡せる一つの景観として、また居住生活の一つの単位として、建築計画的に重視されてきた。しかし、視覚的に見渡せない「一帯型」の集合体も存在し、「散在型」の構成要素であっても、ある程度の密度で分散する事により、そこに集合体としての性質を与えていていると言える。

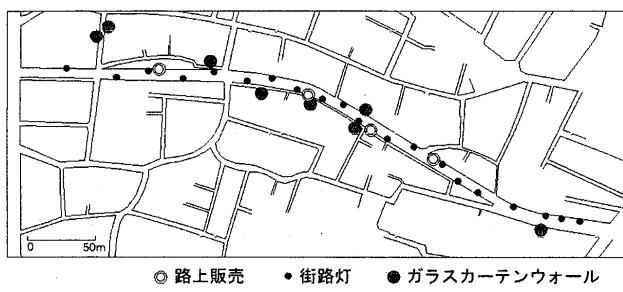


図4 要素分布の例 (Cat. St. 至渋谷)

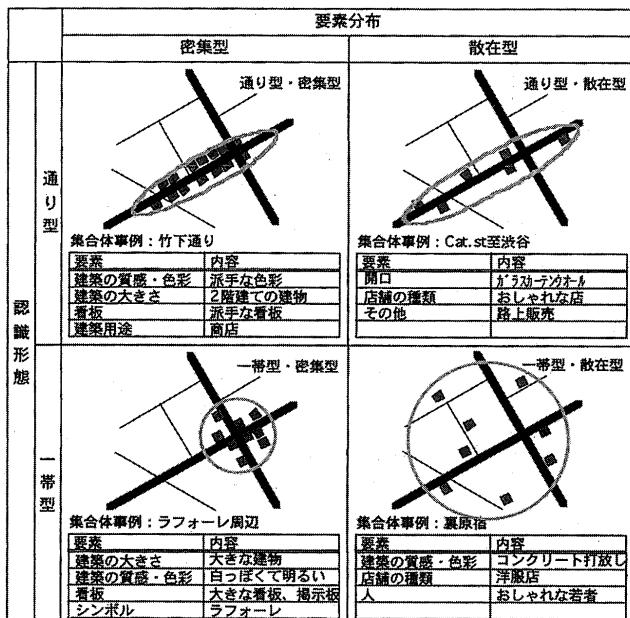


図5 認識形態と要素分布の類型

### 3-3. 認識要因の「好ましさ」評価に関する分析

以降は、集合体の心理的侧面の分析に移る。手順3の最後に、個々の集合体の認識要因となった空間構成要素の「好ましさ」評価を得た。ここでは主要な集合体の認識者の内過半数があげた要素の評価を集計した（図6）（過半数に達しない要素の評価は空白）。個性として「好ましくない」と評価された要素は、明治通りや竹下通りに多く見られ、逆に「好ましい」という評価は表参道アパートや表参道通りに多かった。ただし、「建物の大きさ」については竹下通りで高評価、「開口」については明治通りで高評価となっている。また、表参道アパートの「建築（形態・色彩・大きさ）」、表参道の「街路樹」、Cat. St. 至渋谷の「通り」の評価が特に高かった。さらに、ほぼ同規模の「通り」でも、好ましい表参道、好ましくない明治通りという明確な傾向が見られた。

以上から、小さめの（ヒューマンスケールの）建築を好む傾向や、街路樹や歩行者専用路をかなり好ましいとする傾向が読みとれるが、これらの評価は、それら空間の質の評価であるとともに、外来者としての建築学生の嗜好を反映したものと考えられる。これをそのまま、原宿における集合体の維持・変容の指針とすることはできないが、そこに、現代日本の都市景観に対する規範的な価値観を見ることができるだろう。

また、住宅地や地域の生活環境では、そこの居住者による「好ましさ」評価が、環境改善の指針を決める上で重要となるだろう。

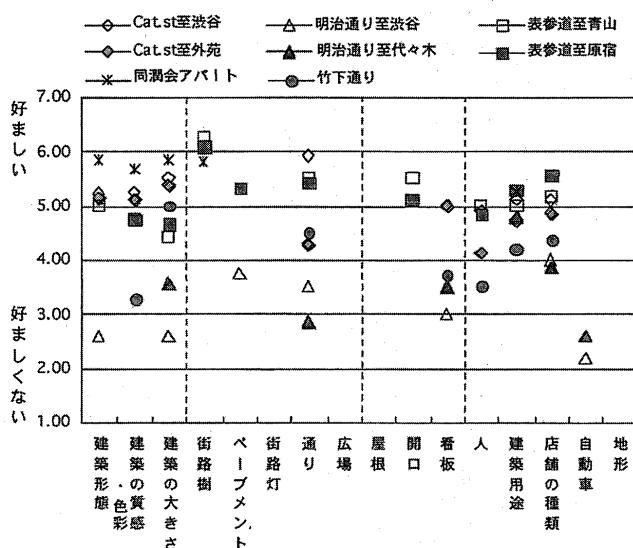


図6 認識要因の好ましさ評価

### 3-4. 集合体の印象評価に関する分析

手順4で行った、7段階・22組の形容詞句対による各集合体の印象評価の結果を基に、主要な集合体8つについて評価の平均値を求めた（図7）。ここに、各集合体の心理的空間特性を概観することができる。

次に、多様な形容詞句対の評価結果から、その評価構造を要約し各集合体の特徴を把握するために、主成分分析<sup>12)</sup>を行った。その結果、22評価軸が以下の3つの主成分に分類された。1つ目は「統一感」「趣」「調和」といった心理評価に関連したものの、2つ目は「有機的」「豪華」「おしゃれ」といった心理評価に関連したものの、3つ目は「楽しげ」「明快」「親しみ」といった心理評価に関連した

ものであった。そこでそれら3つを「統一性主成分」「洗練性主成分」「楽しさ主成分」と解釈し、各集合体の主成分得点を示したものが図8である。例えば、同潤会アパートは、統一性主成分が極めて高く、洗練性主成分が低く、楽しさ主成分がやや低い。また、表参道至青山は、洗練性主成分が極めて高く、統一性・楽しさ主成分ともやや高い。一方、竹下通りは統一性・洗練性主成分ともかなり低いものの、楽しさ主成分はとても高いことが分かる。この様に、外来者の視点で捉えられた、それぞれの集合体の印象評価の特徴が明確になった。これらの結果はあくまで原宿における実験結果であるが、「統一性」「洗練性」「楽しさ」の主成分が、各集合体のそれぞれ異なる心理的特性を明確に説明していると言える。

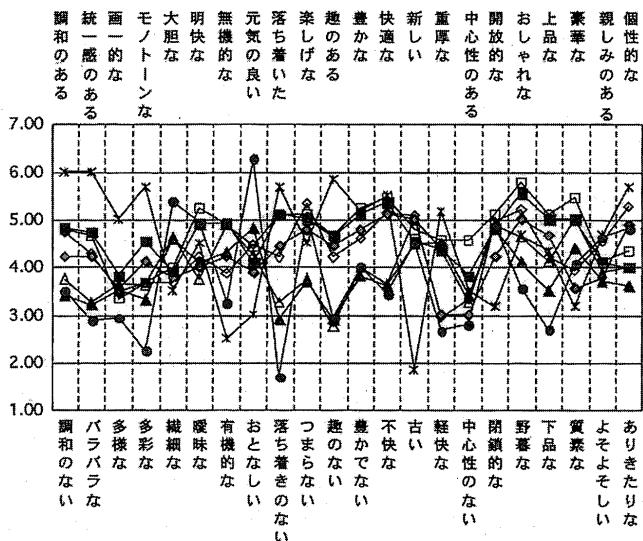


図7 印象評価

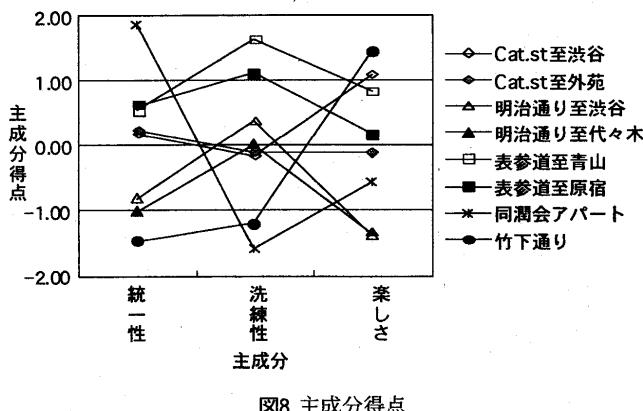


図8 主成分得点

### 3-5. 集合体の「らしさ」に関する分析

次に、これまでの結果を踏まえて、主要な集合体の「原宿らしさ」「東京らしさ」「日本らしさ」について分析する。背景において、都市空間がもつ階層構造の重要性について述べたが、ここでは集合体の個性を「らしさ」の側面から考察し、都市の階層構造の中で捉えるものとする。仮に、都市の持続的変容の中で、その街らしさを增幅させるという課題が設定されたと考えた場合、例えば「原宿らしさ」と「東京らしさ」は必ずしも一致しないだろう。そこで、今回抽出された集合体が、「原宿」「東京」「日本」のどの階層で個性を獲得しているのかを明らかにするために、それぞれの集合体の

「らしさ」の評価を行ってもらった。その結果を平均したものが図9である。

分析の結果、竹下通りや同潤会アパートが最も原宿らしいとされた。また、街路樹による統一感があり、洗練された印象を持つ表参道青山方面は、原宿らしさ、日本らしさはないが、とても東京らしいとされた。さらに、竹下通りやCat.St.、明治通りなど、統一性が低くやや乱雑な集合体に日本らしさを感じていた。この結果から逆に、竹下通りや同潤会アパートが原宿という街の個性にとって、重要な要素であると考えることもできる。こうした、原宿らしくなくとも東京らしい、東京らしくなくとも日本らしいといった構造は、単純な地理的・物理的な階層性からは読みとれない、イメージ上の階層性を示している。

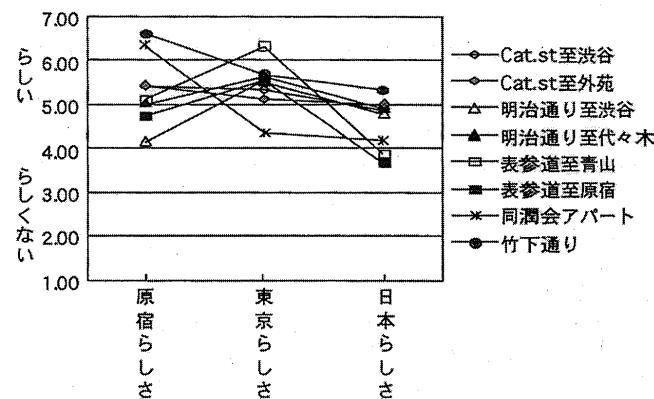


図9 「らしさ」評価

最後に、心理実験の結果から得られた主成分得点をもとに、「らしさ」評価との重回帰分析を行った。これにより、原宿における集合体の「統一性」「洗練性」「楽しさ」といった心理的成分が、「原宿・東京・日本らしさ」とどのような関係を持っていいるかを示すことができた（表2）。この結果からは、「洗練性」と「東京らしさ」、「楽しさ」と「原宿らしさ」の強い相関関係が明らかになった。

表2 主成分得点と「らしさ」評価の重回帰式

変数名	偏回帰係数			定数項	修正済 重相関			
	統一性 洗練性 楽しさ				決定係数	決定係数	係数	
	主成分	主成分	主成分					
原宿らしさ	0.10	-0.58	0.40	5.34	0.87	0.77	0.93	
東京らしさ	-0.27	0.39	0.17	5.43	0.90	0.83	0.94	
日本らしさ	-0.39	-0.30	0.02	4.57	0.78	0.62	0.89	
好き嫌い	1.01	0.29	0.06	4.70	0.98	0.96	0.99	

#### 4. 考察

#### 4-1. 総合的考察

本分析では、集合体が都市空間の意味的豊かさとわかりやすさにとって重要な都市階層上の単位であるとの仮定の上、街の拡がりの中で一つのまとまりとして認識された建築群としての「集合体」に注目し、調査した。まずその認識形態には、街路景観として捉えられる様な「通り型」だけでなく、平面的なまとまりを持った「一帯型」が存在し、通りの一部がそれらの「コア」として捉えられた。そして、まとまりとしての認識を与えた物理的構成要素には、「散

在型」「密集型」という分類をあげることが出来た。こうして、「集合体」という概念のもつ物理的構成のモデルが提示されたと同時に、2002年時点の原宿における集合体の抽出、及び物理的特徴が把握された。この物理的構成要素は、複数の建築を「集合」たらしめている要因であり、集合としての性質をもたらしている空間要素と言える。ただ、そうした空間要素の質や量の特定には、より詳細な調査が必要となるが、必要に応じて集合体ごとに分析すべきであろう。

また、印象評価の結果から、原宿における集合体の個性を「統一性」「洗練性」「楽しさ」という主成分により説明できることが分かり、「らしさ」の側面から個性を分析することで、単純な地理的・物理的な階層性では説明し得ない、イメージ上の階層性が考察された。このように、実際の街の空間体験に基づいて集合体の形態と特性を捉え、物理的・心理的両側面から各集合体の個性を捉える事ができた。原宿において、各種エレメントの質的・量的なまとまりとして認識された多様な「集合体」は、それぞれがより上位の「街」や「都市」のイメージしやすさや意味の豊かさに寄与すると考えられる。そして、本研究は、街の持続的変容という観点から、仮に、「集合体の個性を伸ばす」「その街らしさを維持する」といった課題が、「都市のわかりやすさや多義性を維持したままで」という条件のもとに解かれようとする場合に、その建築的変容の方向性を示す指標になると考えられる。

#### 4-2. 今後の課題

以上に、集合体の性質の分析モデルを示すことができ、集合体という概念の有効性も示したものと考えられる。本研究の調査地は非常に活気のある商業地で、建築や店舗の入れ替えも激しい場所であり、ファッショナブルの個性的な建築が幾つも存在するなど、多くの店舗と建築が1対1の対応関係にあった。即ち、この街では、物理的な建築形態の側面と、利用に伴う意味の側面が対応しやすい関係にあり、これらの持続的な変化を経て集合体を形成していたと考えられる。2002年以降も幾つの建築や集合体が更新されており、例えば同潤会アパートは表参道ヒルズに入れ替わることで建築の集合体ではなくなり、同時にこの原宿らしかった集合体は表参道という集合体に回収されたと言えるのではないか。こうした建築や集合体の更新に伴う個性の維持又は変化の分析を今後の課題の一つとする。

また、本分析では利用者個人にとっての意味の側面は調べなかつたが、この面は住宅地においてより重要なのではないか。均質な建築が並ぶ郊外型住宅地においても、豊かな意味の器となる集合体が形成されうるのか等、本分析モデルの住宅地や他の街への応用をもう一つの課題とする。

#### 注

- 注1) 歴史的景観に統一性と多様性が同時に存在する構造については、伝統的集落の有機的多様性の構造とともに多くの研究が為されている。例えば、恒松ら（文1はその構造を「ゆらぎ」という観点から捉えている）。
- 注2) ゲシュタルト心理学の「まとまりのよさ」の概念を基に、景観評価の前段階としての「まとまり」の把握に注目したものとして、金子らの研究（文3があり、どのような形態が「図」になりやすいかという観点からの研究がなされたが、分析対象は都市景観の遠景画像（写真）であった。一方、本研究では街の空間を実体験する中で把握される「まとまり」に注目した）。
- 注3) 「集合体」の概念については、北尾らの論文（文7で分かりやすく整理され、現代の集合体を協働設計により一から新たに作る場合の、作られ方に關して研究された。一方で本研究は、現代の集合体も個の入れ替えを内包したものとして捉え、既存の街空間を調査対象としている）。

- 注4) 「らしさ」については、船越・積田ら（文8（文9）により日本の感覚を与えるファサードデザインや、建築の用途別の「らしさ」について研究されたが、本研究ではこれら概念を援用し、「原宿・東京・日本らしさ」という評価の階層の中に集合体の個性を位置付けた）。
- 注5) 具体的内容とは、例えば「建築の大きさ」であれば、どの程度の大きさか、「開口」であれば、どのような開口かが一言のコメントで記入された。なお、この記入は強制ではない。
- 注6) 予備調査としては、筆者と調査員1名により、代官山および原宿で本調査と同様の調査が行われた。この調査により、認識要因となった空間構成要素に項目を追加するなどの修正を行った。
- 注7) 本分析で用いた形容詞句については、文1）文9）等で用いられたものを参考に、独自の語句を加え、やや多めに選定した。
- 注8) 項目中「質感」と「色彩」を分けると「建築表面の性質（Surface）」をどちらで評価するか混乱してしまうと考えられたため、Surfaceをトータルに評価するために「質感」と「色彩」は同じカテゴリーとした。また、「建築用途」と「店舗の種類」については物理的な空間構成要素とは言えないが、集合体の認識要因として重要な要素となることが予想されたため、ここでは項目に含めることとした。
- 注9) 「集合体」は、K・リンチ（文5）による[Complex]の概念(PathやDistrict等の物理的構成要素の複合体)に近いものであり、「通り型」はPathが支配的な複合体であり、「一帯型」はDistrictやNodeが支配的な複合体であると言えるだろう。ただ、リンチのあげたPathやDistrict等5つのエレメントは都市全体のイメージを構成する要素であるため、集合体の分類項としての「通り」や「一帯」とは必ずしも一致しないと考えられる。
- 注10) 「同潤会アパート」の認識者数は過半数に満たないが、取り壊された旧同潤会アパートの原宿における位置づけを示す資料として、参考として取り上げることとする。
- 注11) 評価対象となる街路が事前に設定されている点など、調査の手続きは異なるが、積田（文9）の研究において「指摘量分析」として、表参道等の「街路空間の特徴として指摘された構成要素」に関する詳細な分析がある。
- 注12) 評価構造の分析には、因子分析を用いて「因子負荷量」により説明することがより一般的だが、評価構造を要約し、各集合体の個性を比較し説明するという目的のためには「主成分得点」を用いることがより明快であると考え、主成分分析を採用した。

#### 参考文献

- 文1) 恒松良純、船越徹、積田洋：街並みの「ゆらぎ」の心理量分析-街路景観の「ゆらぎ」に関する研究（その2）-、日本建築学会計画系論文集第597号、pp.45、2005年11月
- 文2) 門内輝行：街並みの景観に関する記号学的研究、東京大学学位論文、1997年
- 文3) 金子英樹、宮田紀元：建築群を含む都市景観に関する視覚形態の分析-図になりやすさについての考察-、日本建築学会計画系論文集第526号、pp.99-105、1999年12月
- 文4) 志水英樹、福井通：市中心街地におけるイメージの構造（その4）-レジビリティとアンビギュイティに対する情報理論的考察-、日本建築学会計画系論文集第263号、pp.101-108、1978年1月
- 文5) K. リンチ：都市のイメージ、岩波書店、1968年
- 文6) 北尾靖雅、内井昭蔵：建築集合体の集合モデルと構想を用いた協働設計方法の研究-マスターーアーキテクト方式による建築集合体の設計方法への展開-、日本建築学会計画系論文集第546号、pp.171-178、2001年8月
- 文7) 船越徹、積田洋ら：ファサードの研究（その20-29）-、日本建築学会大会学術講演梗概集E-1分冊、1996年-1999年9月
- 文8) 船越徹、積田洋ら：建築の「らしさ」の研究（その1-5）、日本建築学会大会学術講演梗概集E-1分冊、1996年-1999年9月
- 文9) 積田洋：心理量分析と指摘量分析による街路空間の「図」と「地」の分析-街路の空間構造の研究（その1）-、日本建築学会計画系論文集第554号、pp.189-196、2002年4月

(2006年12月10日原稿受理、2007年6月28日採用決定)